旭川医科大学回顧資料（５）昭和52年度

第３期生の解剖学実習感想文より

昭和52年（1977年）といえば、日本の首相は、三木武夫に代わって前年末に就任した福田赳夫であった。ちなみにアメリカでは１月にフォードに代わってカーターが第39代大統領に就任した。

この年は日本国憲法施行30周年にあたっていた。それにあわせて野党勢力は、５月３日の憲法記念日に東京で記念集会を開催した。しかし政府のほうは、すでに前月に、政府主催の記念式典は行なわない方針を決めていた。

同じ５月には、東京駒場に大学入試センターが設置され、国立大学共通一次試験の問題作成・採点などに関する調査研究をスタートさせた。この共通一次試験は２年後の昭和54年（1979年）に初めて実施されることになる。

７月には宇宙開発事業団が初の静止気象衛星「ひまわり」をアメリカのケープカナベラルから打ち上げ、気象庁がその運用を開始した。

同じ７月、文部省は小中学校の学習指導要領の改正を告示した。この改正によって、小学校算数から「集合」が削除され、中学校１・２年生の英語の授業が週３時間に減らされるなど、教科の内容・時数が削減され、「ゆとり」教育への方向づけがなされた。

この年の日本人の平均寿命は、男性が72.69歳でスウェーデンを抜き世界１位となり、女性は77.95歳で同国と並んで1位となった。

この年、旭川医大では、昭和48年（1973年）入学の第１期生が５年生となり、臨床講義が本格化した。当時のカリキュラムでは、１、２年次のほとんどが一般教育に当てられ、３年次になってようやく、解剖学講義および人体解剖実習を皮切り（文字どおりの「皮切り」）に基礎医学の授業が展開された。人体解剖の実習は医学生にとってのイニシエーションであり、実習終了後には医学生としての強い自覚が芽生えるといわれる。いうまでもなく人体解剖実習には、篤志家が生前の自発的な意志によって提供してくださった御遺体、つまり献体が利用される。各大学がそれを受け入れる際に仲介の労をとっているのが、白菊会という全国的な組織である。本学では、昭和50年（1975年）に解剖学第一講座内に白菊会の支部が置かれた。その後、多くの支部で独立運動が盛んになり、その流れを受けて、本学でも、昭和57年（1982年）10月１日付で独自の運営組織である旭川医科大学白菊会が誕生し、今日に至っている。

さて、昭和52年（1977年）度に３年生であった第３期生（そのほとんどが昭和50年４月入学）が、解剖学第一講座の仲西忠之教授（当時）の指導のもと、解剖実習終了の直後に綴った感想文集が残っている。白菊会旭川医科大学支部の機関紙「たいせつ」の第２号として同年８月30日付で発行された、「旭川医科大学解剖学実習感想文特集号」である。Ｂ５判32ページの冊子で、献体運動の推進のための啓発活動の一助にと企画されたものと思われる。この文集の中に、おおむね400字から600字にわたる、第３期生全員の文章が収録されている。

冒頭には下田晶久学長（当時）による発刊の辞が載っている。

「……『医学生となって最初に経験する衝撃が解剖学実習である』とよく言われるが、人体の構造の精妙さを眼のあたりに視て感動に打たれる点もさることながら、何と言っても、死者との対応に自らの全人格を問われる点が最も深刻な体験であると思われる。死、そして死に到らしめた現象そのものと終生関わり合って行かねばならぬ自らの使命を、解剖学実習の段階ではっきり自覚させられるわけである。医学教育における人体解剖学実習の意義は、実にこの点にかかっているのであって、社会情勢の推移に拘らずこの実習を正しく維持して行かねばならない責務を改めて痛感するとともに、学生諸君の一人ひとりが、この実習を契機として将来健全な医人に大成されんことを祈念してやまない」。

今回、回顧資料として、この文集から３人の学生の文章をそのまま抜粋して紹介する。四半世紀前の文章とはいえ、プライバシーの問題もあるので執筆者の氏名は伏せた。人体解剖の体験を、哲学・思想、あるいは人間観・死生観の問題と関連づけて論じている学生が少なくない。社会主義者のマルクスやエンゲルスの言葉を引用していたり、実存主義思想に言及していたりするものもあって、現代の大学生の文章と比べると隔世の感がある。

（旭川医科大学　歴史・哲学　　近藤　均）

＊　　＊　　＊

脳の解剖を除いて昨年の11月から今年の３月まで続いた人体解剖実習を終えた今、振り返ってみると本当に短い期間であったが、自らの医学についてのそれまでの認識、把握のしかた及び医者という職業に対する漠然としてではあるが安直な幻想が、根本的に修正あるいは変革を余儀なくされた。

実際に遺体に接し、自分の両手にピンセットを手にし、自分の両眼で本当の意味での他者に立ち向かった時、喜びも哀しみもなく、深い吐息を伴って重い不安が胸に籠る。

遺体は感情を持たぬ一個の物体としてそれ自身、あらゆる観念論を排せと語りかけてくるようだ。

この背理を凝視することが、生きている人間を対象とする科学者としての医者が、終生対決を迫られ自己深化させていかねばならぬ問題であり、人間が科学を生かすための課題であると思う。

種々の疾病に悩む生身の人間を扱う臨床医あるいは医学者を目指す医学生にとって、物言わぬ遺体との対決、格闘がどうしても必要である。

〈死は個人に対する類の冷酷な勝利のようにみえ、またそれらの統一に矛盾するようにみえる。しかし特定の個人とは、たんに一つの限定された類的存在にすぎず、そのようなものとして死ぬべきものである〉（マルクス）。本来マルクスを受け入れぬ独自の倫理観を有する一般大衆が、献体を拒絶するのは当然のことであり、個人の観念領域に踏み込むことは傲慢である。

憎むべきは献体を自ら否定する偽科学者及び本質を自身に問い、課題を担うことなく「実習はたいへん役立った」とぬけぬけと擦り抜ける偽医学生である。

＊　　＊　　＊

「解剖実習」。この言葉は医学部に入学した者全てにとって最初の関門であり、最初の目標であります。教養の多くの―医学的ではない―講義の後に待っている、医学生としての最初のエポックであります。私にとっても例外ではなく、大げさにいえば人生始まって以来の破天荒な出来事でありました。おそらくStudents dissecting roomと銘打たれた実習室に初めて足を踏み入れた時の緊張感は、生涯忘れ得ぬものになるでしょう。その後の夜昼のないハードなトレーニングはおそらく、その緊張度の高さ並びに密度の濃さにおいて医学部に特有なものであり、他大学と異なる点の一つではあるまいか。そして医学部内部においても、最も集中力を要求されるものの一つではないかと、私は感じております。実際、解剖実習を終えた仲間（自分も？）には単に知識的のみではない医学生から医師への自覚のようなものが芽生えてきているように見え、一種の感慨を覚えます。もちろん様々な不満がないわけではなく、そのたびに、いらいらしたり、くさったりしたこともありましたが、しかし今、私の体内には何か大きなことをやりとげたという素晴らしい充実感が満ちあふれているのです。

＊　　＊　　＊

骨学実習に始まる一連の解剖実習も最後の脳解をもってすべて終了した。我々実習生の最大の山場はやはり、その中でも人体そのものの解剖であった。最初に御遺体に接した時の、あの興奮を今ふと思い出す。緊張と、とま

どい、恐れ、得体の知れぬ罪悪感等は、果たして私がクリスチャンである為のものだったのだろうか。法医解剖はその前に数度見てきたのであるが、観察者としてのそれはむしろ興味本位のものであったと今は思われる。

実習が進むにつれて、しかし、実習最初の緊張がほどけ、実習そのものがおもしろくなり、ついには事が順調に進んでゆく時など思わず鼻歌がでる始末となる。幾度も幾度も教授から戒められていた事である。己の魂の低俗さに気づかされる事しばしばであった。実習の最後、花を持ってゆき、しばらく白衣に包まれた御遺体と対峙していると、むらむらと急に愛着心とも親しみともいえる感情が湧いてきて、御遺体をかきいだきたい衝動にかられたのは私だけではないだろう。グループ代表として合同葬儀に立ち合せてもらった日の事は、私は一生忘れられない。

その日、実習の最中に教授から受けた戒めの言葉の一つ一つが痛いように思い出され、初めて身にしみたのである。

実存主義における Da-sein（現存在）は人間のみのものであると言う事が頭に浮かぶ。遺族。また、身寄りのない御遺体であってもその生は私達医学生にも引き継がれた。私達のグループの御遺体の御遺族の涙ながらの丁寧な言葉「色々本当にありがとうございました。」を私は一生忘れるわけにはいかない。慣れ易く、卑俗で傲慢な私は、早くも自分の大病のゆえ、死に直面した事さえ忘れかけている。新聞配達をして医学を目ざし、志をもっての数年間を忘れかけている。わずか数日の合同葬儀の事であったが、私のようなものにとっては、解剖知識の吸収より、はるかに心に残る事であり、今後忘れてはいけない事なのである。